

日暮遺跡第33・34次発掘調査報告書

—市営新八雲住宅建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2010年3月
神戸市教育委員会

日暮遺跡第33・34次発掘調査報告書

—市営新八雲住宅建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2010年3月
神戸市教育委員会

序

大阪湾の豊かな恵みと肥沃な土地、温暖な気候、交通の要衝という条件に恵まれた葺合地区には、古くは弥生時代から生活が営まれてきました。はるか昔からの生活は有形・無形の多くの文化財を現在に伝えています。しかし生活そのものの痕跡は埋蔵文化財として土の中に残されており、発掘調査を通してしか私たちの目に触れません。

埋蔵文化財は、文書に記されない地域の歴史を雄弁に物語る資料であり、市民にとって欠くことのできない財産です。地域の歴史を知ることは、地域を愛する心を育むことにつながるものと思います。やむを得ず失われる埋蔵文化財を、調査によりその内容を把握し、成果を広く公表し、多くの方々に活用していただき、後世に伝えることが、今に生きる私たちの努めだと考えます。

日暮遺跡の発掘調査では、平安時代から鎌倉時代にかけての集落跡を検出し、海に近いこの地域で繰り広げられた当時の人々の多様な生活の跡が明らかになりました。

これらの調査成果が地域の歴史にとどまらず、平安時代から鎌倉時代にかけての具体的な地方像を知る上でとても重要な資料になることでしょう。今後様々な形で活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、本調査が関係諸機関及び地域住民の皆様の多くなるご理解とご協力によって、長期間にわたり実施することができましたことに、厚くお礼を申し上げます。

平成22年3月

神戸市教育委員会

例　　言

- 本書は、神戸市中央区八雲通3丁目において、平成20年度から平成21年度にかけて発掘調査を実施した、日暮遺跡第33・34次埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 当調査は、市営新八雲住宅建設事業に伴うもので、神戸市教育委員会・神戸市体育協会が神戸市都市計画総局の委託を受け実施した。現地における調査は平成21年2月2日から平成21年3月30日（第33次調査）、平成21年4月8日から平成21年4月20日（第34次調査）の期間で実施し、東喜代秀が担当した。
- 本書で使用した地図は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「神戸首部」、神戸市発行の2,500分の1地形図「新神戸駅」を使用した。
- 本書に用いた方位・座標は平面直角座標系第V系で、標高は東京湾中等潮位（T.P.）で表示した。
- 現地調査に係る造構の実測、写真撮影は、東が行い、遺物整理作業は平成21年度に神戸市埋蔵文化財センターで実施した。遺物写真は、神戸市埋蔵文化財センターにおいて独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所牛島茂氏の指導の下、西大寺フォト杉本和樹氏が撮影した。本書の執筆は東が担当した。
- 発掘調査で出土した遺物並びに図面・写真類は、神戸市埋蔵文化財センターで保管している。

調査体制

神戸市文化財保護審議委員会委員 史跡・考古担当（平成20・21年度）

工柴 普通 大阪府立狭山池博物館長

和田 晴吾 立命館大学教授

教育委員会事務局	平成20年度	平成21年度
教 育 長	横口 秀志	横口 秀志
社会教育部長	黒住 章久	大寺 直秀
教育委員会参事（文化財課長事務取扱）	柏木 一孝	柏木 一孝
社会教育部主幹（埋蔵文化財指導係長事務取扱）	丸山 肇	—
社会教育部主幹（埋蔵文化財センター所長事務取扱）	渡辺 伸行	渡辺 伸行
埋蔵文化財指導係長	—	丸山 肇
埋蔵文化財調査係長	千種 浩	千種 浩
文化財課主査	丹治 康明	丹治 康明
	安田 滋	安田 滋
	—	斎木 嶽
事務担当学芸員	阿部 敬生	中谷 正
	中谷 正	—
遺物整理担当学芸員	黒田 恭正	黒田 恭正
	佐伯 二郎	佐伯 二郎
保存科学担当学芸員	中村 大介	中村 大介

御神戸市体育協会	平成20年度	平成21年度
会長	表 孟宏	表 孟宏
副会長（専務理事事務取扱）	小川 雄三	小川 雄三
常務理事	穠 弘四郎	穠 弘四郎
総務課長	赤沢 徹	赤沢 徹
調査担当学芸員	東 喜代秀	—

目 次

序

例言

日次

第1章 はじめに

- 第1節 調査にいたる経過 1
第2節 遺跡の位置と歴史的環境 2

第2章 調査の概要

- 第1節 既往の調査概要 5
第2節 基本層序 7
第3節 調査の成果 10
第4節 出土遺物 13
第3章 まとめ 15

報告書抄録

挿図目次

- 図1 日暮遺跡位置図 1
図2 日暮遺跡と周辺の遺跡 3
図3 調査位置図 5
図4 3区土壌断面図 8
図5 調査区配置図 8
図6 調査区造構平面図 9
図7 3区第1造構面平面図 10
図8 3区東側第2造構面平面図 11
図9 3区西側第2造構面平面図 11
図10 SK205平面・断面図 12
図11 SK206平面・断面図 12
図12 湿地状落ち込み断面図 13
図13 出土遺物実測図 14

表目次

- 表1 日暮遺跡既往調査一覧 6

写真目次

- 写真1 地元説明会風景 日次

- 写真2 S P2110土師器皿出土状況 12

写真図版目次

- 図版1 調査地遠景航空写真（西から）
調査地遠景航空写真（東から）
図版2 3区東側第2造構面全景（南東から）
3区西側第2造構面全景（西から）
図版3 1区全景（西から）
1区全景（東から）
1区SD01（東から）
1区SD02遺物出土状況（東から）
図版4 2区全景（北から）
3区西側第1造構面（東から）
3区西側第2造構面全景（南東から）
図版5 3区SK205・SK206（南西から）
3区西側第2造構面（南東から）
3区西側湿地状落ち込み断面（南から）
図版6 出土遺物1~9
図版7 出土遺物10~14、19~21
図版8 出土遺物15~18



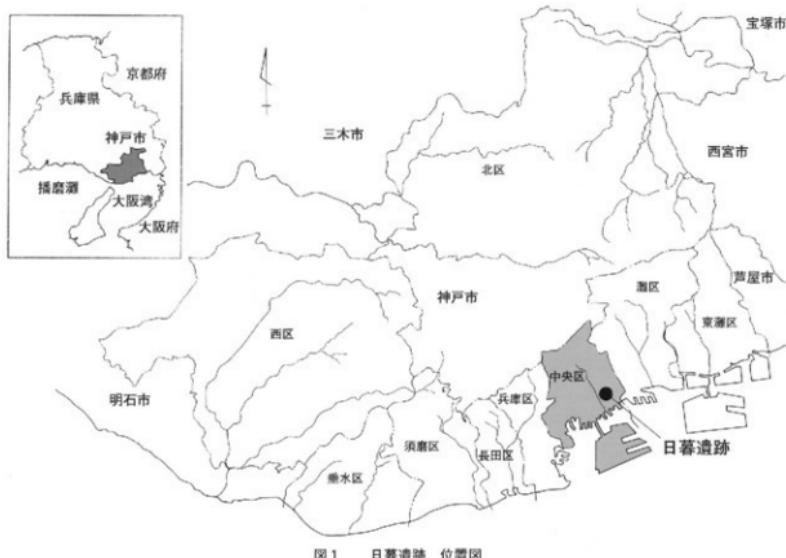
写真1 地元説明会風景

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

日暮遺跡がある、中央区日暮通・吾妻通・八雲通・東雲通・筒井町周辺は、明治以降早くに市街化が進み、また古くからの商業区域であり、春日野道商店街、大安亭市場などの多くの商店街が基盤の目状に存在し、家屋が密集する地区である。そのため遺跡の分布状況も不明確で、市営住宅の建設に伴う試掘調査で日暮遺跡が発見されたのは「昭和」も終わりに近い昭和61年（1986）になってからである。その後大小さまざまな調査を重ね、今回報告する調査が第33次・34次調査となる。

今回の調査は市営住宅の建て替え工事に伴うもので、平成20年度に試掘調査を実施し、事業地内に埋蔵文化財が存在することが判明したため、工事により埋蔵文化財が影響を受ける範囲について発掘調査を実施したものである。



第2節

遺跡の位置と歴史的環境

日暮遺跡は、六甲山系から派生する尾根から流れ出る生田川等の中小河川によって形成された沖積地の末端部に立地する遺跡である。現地の標高は約16mである。現在の海岸線から北へ約800mの場所に位置しているが、古代以前には約200~300mであったと思われる。

歴史的環境

縄文時代

日暮遺跡の歴史的環境を、周辺にある主要な遺跡とともに略述する。

生田川流域の雲井遺跡で、早期前半の集石遺構や土坑が検出されている。大川式・神宮寺式と呼ばれる、阪神間では縄文時代最古の押型文土器を伴っている。また晩期～弥生時代前期の土坑・柱穴・上坑墓などが検出されており、広範囲に集落が存在すると考えられている。熊内遺跡では早期前半の竪穴住居や、中期末～後期初頭の土坑が検出されている。生田遺跡では中期（船元式）～後期末（宮窓式）までの遺物が大量に出土し、地域の中心的集落であると考えられている。また後期後葉の上偶やヒスイ製小玉が出土している。

弥生時代

雲井遺跡では、弥生時代前期後半の周溝墓が検出されている。また中期の方形周溝墓が多数検出されており、墓域が広範囲に広がっていることが確認されている。中期では生田遺跡で竪穴住居と方形周溝墓が検出されている。後期になると遺跡数が増加し、集落の形成が活発に行われるようになる。熊内遺跡では、大規模な「重環濠を巡らす集落が検出されている。

古墳時代

古墳時代前期には、熊内遺跡で竪穴住居が検出されている。中期になると日暮遺跡、生田遺跡、二宮遺跡、二宮東遺跡で集落が認められる。生田遺跡では、中期末から後期の竪穴住居や掘立柱建物が多数検出されている。後期になると熊内遺跡で上坑墓や木棺墓が検出され、下山手遺跡では、後期の掘立柱建物群が検出されている。また周辺には割塚古墳、生田町古墳、中宮古墳、三本松古墳等がかつて存在していたが、現在では消滅しており、詳細については不明である。墳丘と石室が残存しているのは、中宮黄金塚のみである。

飛鳥時代以降

二宮遺跡では、飛鳥時代の鋳造遺構が確認されている。同時期の集落は、下山手北遺跡でも確認されている。奈良時代になると山陽道が築造され、地域での陸上交通が充実していく。日暮遺跡では奈良時代の掘立柱建物が検出され、古代山陽道との関連が考えられる遺跡である。また古代には、日暮遺跡の東約1kmに、「万葉集」に記された「敏馬浦」とよばれた港があったと考えられている。また、二宮遺跡では、流路状の遺構から奈良時代前半の上器や土馬が出土している。旧三宮駅構内遺跡からは奈良時代後半の土器が大量に出土している。平安時代では、下山手北遺跡で前期の園池と掘立柱建物が検出されている。鎌倉時代になると、宇治川南遺跡、吉妻遺跡、中山手遺跡で掘立柱建物等の遺構が検出されている。南北朝時代から室町時代にかけて、現在城山と呼ばれている山上に滝山城が築城される。戦国時代末期には、現在の兵庫県丹波付近に花隈城が築城されるが、その規模等は不明である。



図2 日暮道路と周辺の道路

$S = 1 : 25,000$

主要参考文献

- 1 雲井遺跡 丹治康明 「雲井遺跡第1次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1991
安田 淳 「雲井遺跡第4次調査」『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』 1994
西岡巧次・福島孝行「雲井遺跡（第8次調査）－震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査概要－」
神戸市教育委員会 1998
- 2 熊内遺跡 丸山 肇他 「熊内遺跡」『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1992
浅岡俊夫編 「神戸市東灘区熊内遺跡－第2次調査－」六甲山麓遺跡調査会 1996
- 3 生田遺跡 安田 淳他 「熊内遺跡第3次調査発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2003
丸山 肇 「生田遺跡」『昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1990
中谷 正 「生田遺跡第4次発掘調査概要－中山手地区再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
概要報告書－」神戸市教育委員会 2006
- 4 二宮遺跡 谷 正俊 「二宮遺跡 第1次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2001
石島三和 「二宮遺跡発掘調査報告書－第2次調査－」神戸市教育委員会 2003
- 5 二宮東遺跡 矢田 哲編 「二宮東遺跡発掘調査報告書」 2004
- 6 下山手遺跡 藤井直正・藤本史子他 「神戸市 下山手通遺跡」大手前大学史学研究所 2001
- 7 生田町古墳 木村次雄・小林行雄 「釵子発見の神戸市生田町古墳」『考古学雑誌』20-6 考古学会 1930
- 8 中宮古墳 梅原木治 「神戸中宮古墳とその遺物」『古墳記』1926
- 9 中宮黄金塚古墳 菅本宏明 「中宮黄金塚古墳」『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1994
- 10 下山手北遺跡 須藤 宏 「下山手北遺跡第二次発掘調査報告－揖津国菟原（八部）郡宇治郷所在の遺跡－」
神戸市教育委員会 2006
- 11 旧三宮駅構内遺跡 菅本宏明他 「旧三宮駅構内遺跡」『平成2年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1993
丹治康明他 「宇治川南遺跡」『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1986
- 12 宇治川南遺跡 浅岡俊夫・古川久義編 「神戸市中心区告堺遺跡－第2次調査－」六甲山麓遺跡調査会 1994
- 13 吾妻遺跡 木戸雅寿他 「中山手遺跡 第2次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2000
- 14 中山手遺跡 平田博幸他 「中山手遺跡」『平成10年度年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1999

第2章 調査の概要

第1節 既往の調査概要

日暮遺跡は、昭和61年度に市営住宅建設に伴う試掘調査を実施した際に発見された遺跡である。本格的な発掘調査は、昭和61年度の第1次調査が最初で、この調査では、古墳時代の堅穴住居及び平安時代の掘立柱建物と皇朝銭を埋納した地鎮遺構が検出され、また柱穴埋土から綠釉陶器、灰釉陶器が出土している。

その後、共同住宅や個人住宅建築などに伴い、延べ32回の調査を実施している。調査成果については表1に示すとおりであるが、弥生時代後期から近世に至る遺構や遺物が検出されており、特に古墳時代と平安時代に集落が盛行することが確認されている。

今回の調査は、市営住宅の建て替え工事に伴うもので、平成20年度に試掘調査を実施し、事業地内に埋蔵文化財が存在することが判明したため、工事により埋蔵文化財が影響を受ける範囲約900mについて、発掘調査を実施した。なお、従前の市営住宅の基礎により損壊を受けている部分を除いたため、調査区が3ヶ所に分かれている。調査地内に掘削残土を仮置きするため、分割して調査を実施し、便宜的に1区～3区と番号を付した。なお、年度内に調査が終了しなかったため、平成21年度は3区西側部分について調査を実施した。したがって、平成20年度に調査を完了した715m²を第33次調査、平成21年度に調査を実施した185m²を第34次調査としている。



図3 調査位置図 S=1:2,500

次数	調査年度	調査地	調査機関	調査面積 m ²	主な調査内容	文献
1	86	日暮通1丁目	神戸市教育委員会	730	古墳時代 壁穴住居、平安時代 捩立柱建物	1
2	89	筒井町3丁目	神戸市教育委員会	530	6～7世紀 捩立柱建物、奈良時代～中世 ピット・溝	2
3	91	東雲通1丁目	淡神文化財協会	536	古墳時代前期 壁穴住居	3
4	91	東雲通1丁目	神戸市教育委員会	350	弥生時代末～古墳時代中期 壁穴住居・土坑・ピット、平安時代～鎌倉時代 ピット	3
5	93	東雲通1丁目	神戸市教育委員会	190	古墳時代前期 壁穴住居・土坑・ピット・集石遺構	4
6	94	筒井町3丁目	神戸市教育委員会	390	平安時代 捩立柱建物・ピット	5
7	94	筒井町3丁目	関西文化財協会	520	古墳時代 壁穴住居、平安時代 土坑	—
8	95	筒井町3丁目	神戸市教育委員会	82	近世以前の溝・土坑	6
9	95	日暮通2丁目	神戸市教育委員会	470	平安時代前期～後期 溝	6
10	95	脇浜町3丁目	神戸市教育委員会	775	奈良時代 捩立柱建物・網・溝	6
11	95	筒井町3丁目	神戸市教育委員会	94	7世紀前半 溝・ピット・土坑	6
12	95	筒井町1丁目	神戸市教育委員会	800	古墳時代 溝・中世 溝・落ち込み	6
13	96	吾妻通1丁目	神戸市教育委員会	200	古墳時代 溝・ピット・奈良時代～平安時代 捩立柱建物	7
14	97	八雲通1丁目	神戸市教育委員会	346	平安時代～室町時代 土坑・耕作痕	8
15	99	筒井町3丁目	神戸市教育委員会	370	飛鳥時代～平安時代 捩立柱建物・ピット	9
16	99	筒井町3丁目	神戸市教育委員会	30	飛鳥時代～平安時代 ピット	9
17	99	日暮通1丁目	神戸市教育委員会	58	古墳時代前期 溝・土坑・土器埋り 平安時代後期の牛の飼育地	9
18	99	筒井町3丁目	神戸市教育委員会	56	飛鳥時代～平安時代 捩立柱建物・ピット	9
19	00	東雲通1丁目	神戸市教育委員会	152	平安時代～鎌倉時代 溝・ピット・15世紀 溝・土坑・ピット	10
20	01	東雲通1丁目	神戸市教育委員会	121	弥生時代終末～古墳時代前期 壁穴住居・鎌倉時代～室町時代 捩立柱建物	11
21	03	脇浜町3丁目	神戸市教育委員会	270	弥生時代後期～古墳時代初期 土坑・7世紀 溝・土坑・落ち込み	12
22	04	筒井町3丁目	神戸市教育委員会	60	奈良時代 溝・ピット	13
23	04	東雲通1丁目	神戸市教育委員会	20	鎌倉時代前半 土坑・落ち込み	13
24	05	八雲通1丁目	神戸市教育委員会	15	古墳時代前期 土坑・溝・ピット、平安時代～中世 土坑・溝・ピット	14
25	05	日暮通1丁目	神戸市教育委員会	13	平安時代 溝・ピット	14
26	05	日暮通1丁目	神戸市教育委員会	110	平安時代 溝	14
27	05	八雲通2丁目	神戸市教育委員会	30	弥生時代後期～庄内期 落ち込み・ピット	14
28	05	筒井町3丁目	神戸市教育委員会	220	室町時代～近世 溝・土坑・ピット・落ち込み	14
29	06	筒井町3丁目	神戸市教育委員会	23	鎌倉時代～室町時代 土坑・ピット	15
30	07	八雲通2丁目	神戸市教育委員会	125	弥生時代末～古墳時代 壁穴住居・土坑 中世 土坑・ピット	16
31	07	日暮通1丁目	神戸市教育委員会	300	平安時代～中世 捩立柱建物・溝・土坑・ピット	16
32	08	日暮通1丁目	神戸市教育委員会	235	平安時代 溝・土坑・ピット 平安時代末～鎌倉時代初め 捩立柱建物・ピット	—
33	08	八雲通3丁目	神戸市教育委員会	715	平安時代末～鎌倉時代初め 溝・土坑・ピット	本書
34	09	八雲通3丁目	神戸市教育委員会	185	平安時代末～鎌倉時代初め 溝・土坑・ピット・湿地状落ち込み	本書

表1 日暮遺跡既往調査一覧

既往調査参考文献

- 1 谷 正俊 「日暮遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1989
- 2 丸山 潤・松林 宏典 「日暮遺跡」「平成元年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1992
- 3 「平成3年度埋蔵文化財発掘調査一覧表」「平成3年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1994
山本 雅和 「日暮遺跡第4次調査」「平成3年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1994
- 4 井尻 格 「日暮遺跡第7次調査」「平成5年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1996
- 5 東 喜代秀 「日暮遺跡第6次調査」「平成6年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1997
- 6 長尾 幸二・岡本 泰典 「日暮遺跡第10次調査」「平成7年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1998
佐藤 公保・岡本 泰典 「日暮遺跡第12次調査」「平成7年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1998
兼原 保明他 「日暮遺跡第11次調査」「平成7年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1998
窟山 直人・東 喜代秀 「日暮遺跡第13次調査」「平成7年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1998
安田 滋・橋詰 清孝 「日暮遺跡第14次調査」「平成7年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1998
- 7 錄田 勉・和田 理啓 「日暮遺跡第13次調査」「平成8年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1999
- 8 口野 博史 「日暮遺跡第15次調査」「平成9年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2000
- 9 谷 正俊 「日暮遺跡第15次調査」「平成11年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2002
谷 正俊 「日暮遺跡第16次調査」「平成11年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2002
須藤 宏 「日暮遺跡第17次調査」「平成11年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2002
谷 正俊 「日暮遺跡第18次調査」「平成11年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2002
- 10 黒田 恭正 「日暮遺跡第19次調査」「平成12年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2003
- 11 西岡 巧次 「日暮遺跡第20次調査」「平成13年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2004
- 12 石島 三和 「日暮遺跡第21次調査」「平成15年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2006
- 13 中居 さやか 「日暮遺跡第22次調査」「平成16年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2007
山本 雅和 「日暮遺跡第23次調査」「平成16年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2007
- 14 「平成17年度埋蔵文化財発掘調査一覧」「平成17年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2008
浅谷 誠吾 「日暮遺跡第28次調査」「平成17年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2008
- 15 浅谷 誠吾 「日暮遺跡第29次調査」「平成18年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2009
- 16 内藤 俊哉 「日暮遺跡第30次調査」「平成19年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2010
内藤 俊哉 「日暮遺跡第31次調査」「平成19年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2010

第2節 基本層序

調査地は、以前5階建の市営住宅が建っていたが、その基礎による搅乱が著しい。基本層序は、盛土を除去すると、近世・近代の耕土が数層堆積し、暗褐色～黒褐色砂質土の遺物包含層が部分的に存在し、その下に風化した花崗岩の砂粒を含む褐色～茶褐色バイラン土、10～15cmの礫を多量に含む褐色～茶褐色バイラン土と続く。このうち風化した花崗岩の砂粒を含む褐色～茶褐色バイラン土は主として調査地の西半部に堆積が認められ、この層がベースとなる。東半部は六甲山より流れてきた土石流の堆積である、10～15cmの礫を多量に含む褐色～茶褐色バイラン土層がベースとなっている。遺構は、遺物包含層である暗褐色～黒褐色砂質土上面とベースである風化した花崗岩の砂粒を含む褐色～茶褐色

バイラン土、及び10~15cmの礫を多量に含む褐色~茶褐色バイラン土上面で検出した。
その下層については砂層と礫層が厚く堆積しており、遺構は確認できなかった。

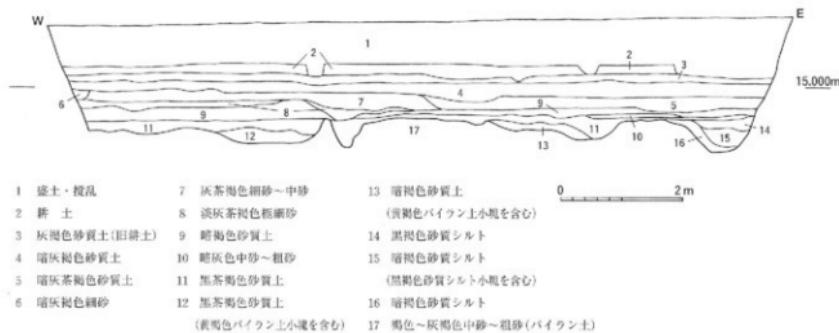


図4 3区 土層断面図

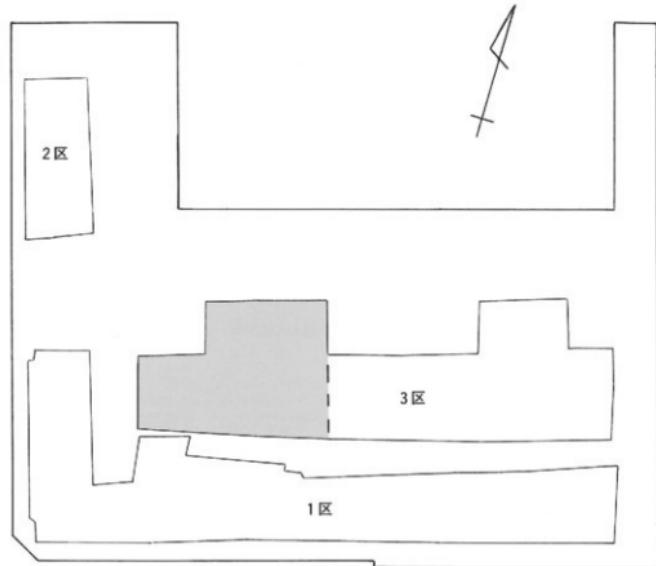


図5 調査区配置図

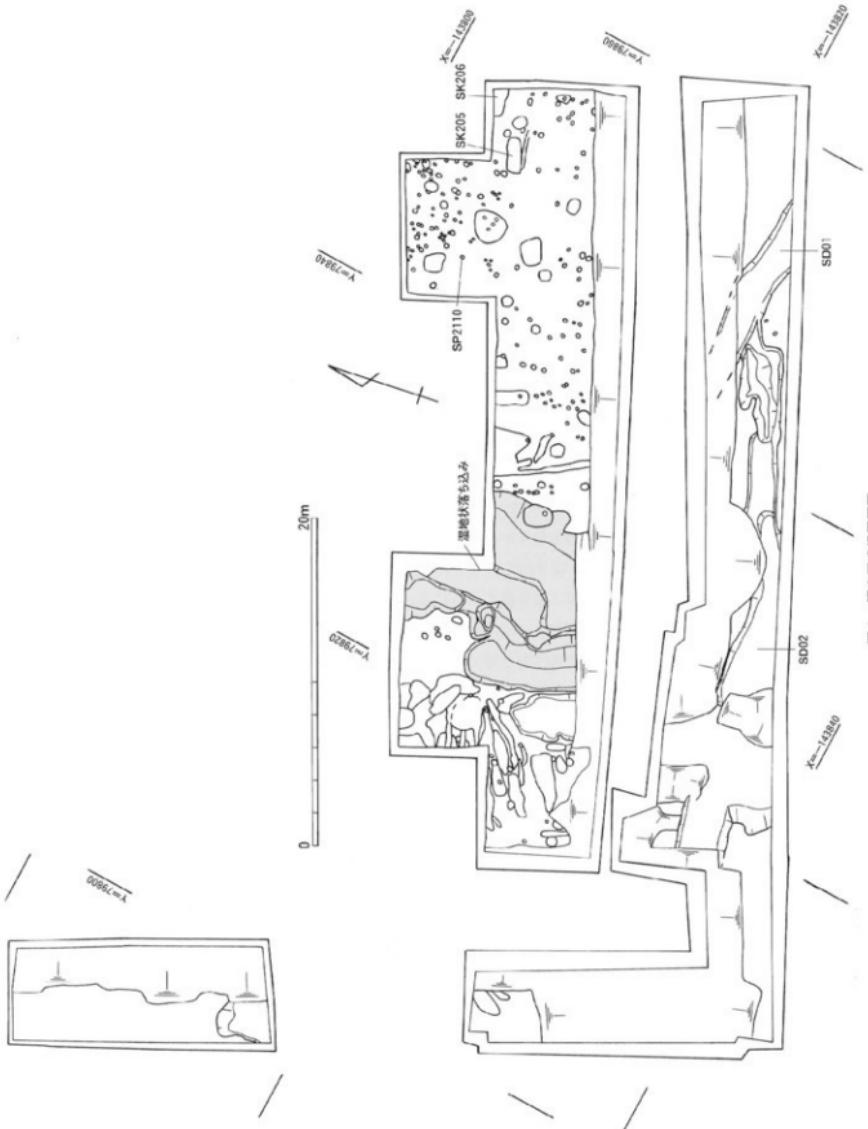


图 6 调查区测点平面图

第3節 調査の成果

- 1 区　　調査地の南側に設けた東西方向に長い調査区である。ベースである褐色～茶褐色バイラン土上面で遺構を検出した。検出した遺構は溝2条、ピット2基である。
- SD01　　幅約2m、深さ約0.3～0.5mの東西方向に流れる溝である。溝の埋土より12世紀代の須恵器鉢と土師器皿が出土している。
- SD02　　幅約1.5～3.0m、深さ0.2～0.6mの東西方向に流れる溝で、東に行くにつれゆるやかに北に弧を描いて曲がっており、SD01に切られている。溝の埋土より12世紀代の須恵器の塊が出土している。
- ピット　　いずれも直径0.2m、深さ0.15mの円形のピットである。
- 2 区　　近世・近代の耕作による削平が著しく、耕土を除去するとベースである風化した花崗岩の砂粒を含む褐色～茶褐色バイラン土を検出し、遺構は存在しなかった。おそらく削平されたものと推定される。
- 3 区　　3区は、東側部分については褐色～茶褐色バイラン土上面で遺構を検出したが、中央より西については上層の暗褐色砂質土上面においても遺構を検出し、下層の褐色～茶褐色バイラン土上面と合わせて遺構面が2面存在した。
- 第1遺構面　溝を15条、土坑1基、ピット3基を検出した。いずれも埋土は暗灰褐色シルト混じり細砂で、これは中世の旧耕土と思われる。
- SD11　　幅約0.8～1.0m、深さ0.1～0.3mの南北に延びる溝である。埋土より12世紀代の須恵器、土師器の小破片が出土している。
- その他の溝　幅約0.2～1.3m、深さ約0.1～0.5mの溝である。いずれも南北方向の溝であるが、SD09のみ調査区の北辺で西に弧を描くように曲がっている。溝は、幅約0.2～0.6m、深さ0.05～0.2mの浅いものと、幅約0.5～1.3m、深さ0.3～0.5mの比較的深いものの二種類に分けることができる。浅い溝は耕作痕と考えられ、深い溝は耕作地の周辺の用水路と考えられる。溝の埋土より中世土器の小破片が出土しているが、詳細な時期は不明である。

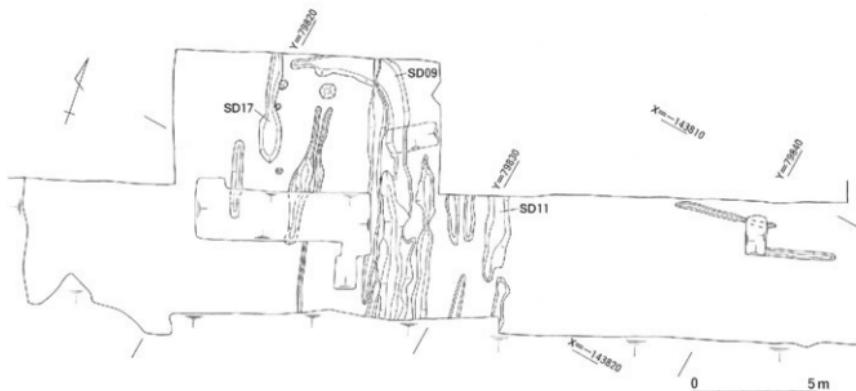


図7 3区第1造構面平面図

土坑 直径0.6m、深さ0.1mの浅い土坑である。埋土より土器の小破片が出上しているが、詳細な時期は不明である。

ピット いずれも直径0.2~0.3m、深さ0.15~0.2mの円形のピットである。



図8 3区東側 第2遺構面平面図

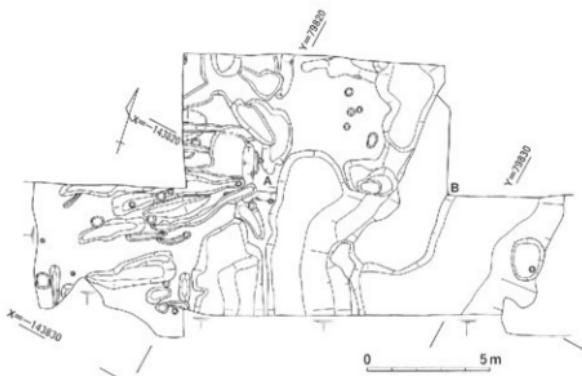


図9 3区西側 第2遺構面平面図

第2遺構面 検出した遺構は、ピット多数、土坑18基、溝多数、湿地状落ち込みである。

ピット 直径0.2~0.5mの円形のピットを約190基検出した。遺構面が削平を受けているようで、ほとんどのピットは浅く、深さは0.05~0.2mであるが、中には0.6mの深さのものもある。直線上に並ぶピットは多数あるが、建物としてまとまるものはなかった。ピットからの出土遺物は須恵器、土師器の小破片がほとんどであるが、土師器の小皿を3枚重ねて埋納しているピットが1基あり、地鎮として使用したものと思われる。

土坑 検出した土坑のうち主なものは次の2基である。その他、楕円形や不整形の土坑が16基存在するが、出土遺物も少なく用途がわかるようなものはない。

S K205 短辺0.8m、長辺2.0mの東西に長い長方形の土坑で、埋土と炭が多量に認められる。床面は固く焼けている。この土坑から東に向かって幅0.2mの溝が延びているが、溝は焼けておらず、炭も認められない。土坑はかなり削平を受けており、深さは0.05~0.1m程度である。床面がかなり良く焼けていることから、何かを長期間燃やしたものであろうと思われるが、用途は不明である。なお、埋土から須恵器、土師器の小破片が出土しているが明確な時期が判明するようなものはなかった。

S K206 S K205の東側約1.5mのところに深さ0.4mの土坑がある。調査区外に拡がるため規模は不明である。この土坑は、埋土に焼土と炭を含んでいるが床面は焼けていない。S K205で出土した焼土と炭を、この土坑に廻棄したものと思われる。

湿地状落ち込み 調査区西側で、落ち込みを検出した。幅約8~11m、深さ0.4~0.8mの規模で、底は凹凸はあるが、概ね北から南に向かって緩やかに傾斜している。埋土は、底付近は砂が堆積しているが、上層は黒褐色砂質シルトが堆積しており、短期間水が流れた後、水の流れがほとんどなくなり、緩やかに沈殿して堆積したものと考えられる。なお埋土より中世の須恵器、土師器が出土している。ほとんどが小破片であるが、灯明皿として使用された土師器皿の完形品が出土している。



写真2 SP2110 土師器皿 出土状況

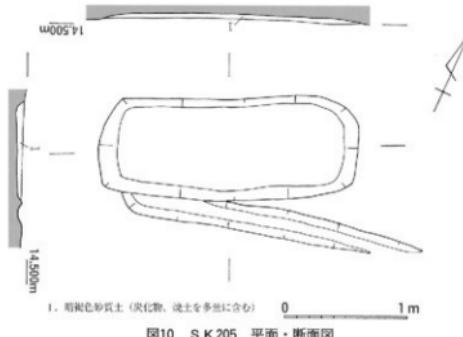


図10 SK205 平面・断面図

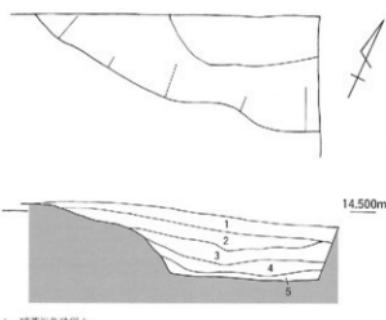


図11 SK206 平面・断面図

溝

調査区西半部で多数の溝を検出した。いずれも湿地状落ち込みに向かって流れているよう見える。溝がつながらず途切れしており、十坑のように見えるものもあるが、これは構造面が削平されて、溝の深い部分が残った結果、そのような形になったものと思われる。すべての溝の埋土は、遺物包含層と同じ暗褐色砂質土で、中世の須恵器、土師器の小破片が出土している。これらの溝は耕作痕もしくは自然に水が流れた跡で、人が意図して掘削したものとは考えにくい。

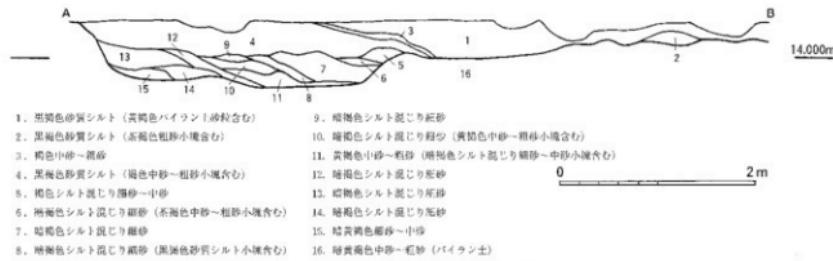
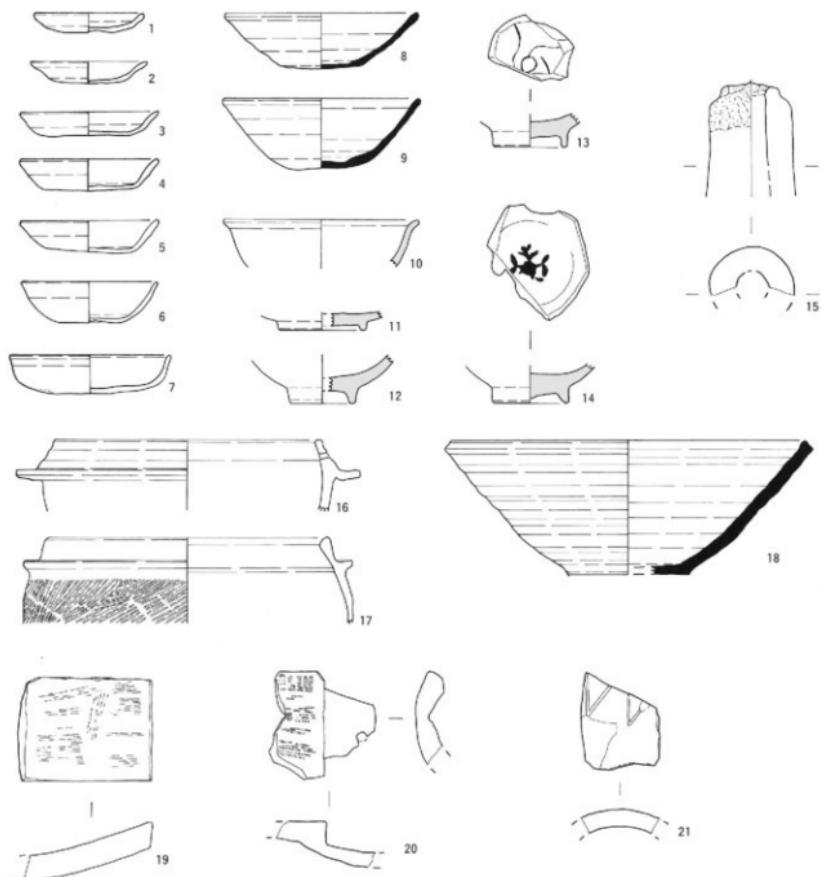


図12 3区 湿地状落ち込み断面図

第4節 出土遺物

図13は今回の調査で出土した遺物である。1～2は土師器小皿で、1は口径8.8cm、器高1.6cm、2は口径9.4cm、器高1.8cmである。3～7は土師器皿で、3は口径11.2cm、器高2.1cm、4は口径11.2cm、器高2.6cm、5は口径11.2cm、器高2.7cm、6は口径11.0cm、器高3.4cm、7は口径13.0cm、器高3.2cmである。7は灯明皿として使用されており、口縁端部に灯芯の痕跡が明瞭に残っている。8・9は東播系須恵器皿で8は口径15.6cm、器高4.6cm、9は口径15.8cm、器高5.8cmでいずれも底部外面に糸切り痕を残す。10～14は中国製青磁碗である。10は口径15.8cm、11は高台径7.0cm、12は高台径5.0cm、13は高台径5.6cm、14は高台径5.8cmで13は見込みに劃文花を刻み、14は見込みに印文花の印刻がある。15は蘭の羽口である。先端部は火を受けて高温のため気泡が融着している。16は土師器釜蓋で口径21.8cm、口縁部に穴を2箇所開けている、17は土師器鍋で口径22.8cm、体部外面に右上がりのタタキを施す。18は東播系須恵器捏鉢で、口径28.8cmである。19は平瓦の破片で両面にナデの痕跡がわずかに残っている。20・21は丸瓦で、20は凸面に網目を残し、21は凹面に斜格子目文タタキを施している。

今回図示した遺物のうち、17を除く土師器、須恵器については概ね12世紀末頃のものであると考えられる。17の鍋は14世紀代のものと考えられる。なお青磁については、遺物包含層より出土したもののが殆どで、おおよそ14世紀末～15世紀前半のものと考えられ、土師器、須恵器より時代的には下るものである。瓦については、小破片で、時期については明確でない。その他図示できなかったが、遺物包含層より白磁の小破片や壙状土鉢、石鍋の小破片も出土している。



1~18 1区SD01 8 1区渤海含砾 9 1区SD02 2 3区SP2013
 3~5 3区SP2116 6~7 3区渤海含砾 10~13·17~20 3区渤海含砾
 14~21 3区SD201 15 3区SD17 16 3区SK212 19 3区SK206

0 20cm

图13 出土遗物实测图

まとめ

今回の調査で明らかになったことについて簡単にまとめてみたい。3区において遺構面を2面検出したが、第1遺構面は第2遺構面の遺物包含層上面で、耕作痕と耕作地周辺の用水路を検出し、第2遺構面の遺物包含層に14世紀末～15世紀前半の遺物が含まれることから第1遺構面の時期は15世紀前半以降であると言える。第2遺構面の時期については、出土遺物から、12世紀末を中心とする時期で、一部14世紀末～15世紀前半の遺構が存在しているものと考えられる。

今回調査を実施した八雲通3丁目は、日暮遺跡の西端に位置し、遺構が希薄な場所であると思われていた。しかし3区東側では、遺構面の削平や擅乱により、建物としてはまとまらなかったが、ピットや土坑などの遺構が集中して検出されており、この地区にも集落が形成されていたことが明らかになった。特に、地鎮と考えられる遺構の存在はごく近くに建物があったことを推定させる。しかしながら、3区の南及び西に位置する1区では遺構がまばらにしか存在していない。のことから集落の中心は調査地の北東側の未調査部分にあるものと考えられる。なお、今回の調査では井戸は検出しておらず、通常掘立柱建物と井戸及び廻もしくは牛垣から構成される屋敷地は、特定できなかった。

また、遺物包含層や遺構から平瓦・丸瓦が出土しているが、出土点数が少数のため、付近に瓦葺の建物が存在するかどうかは明確でない。

出土遺物としては特筆するものはないが、日常雑器以外に輸入陶磁や土鍤が出土しており、海との関係が密接な集落であると考えられる。過去の調査でも蛸壺や多種類の土鍤が出土している。日暮遺跡が位置する場所は海に近く、奈良時代には「敏馬浦」と呼ばれた港が近くにあり、平安時代末においても漁港が存在したことがうかがえる。長田区二葉町遺跡でも、日暮遺跡と同時期の掘立柱建物と井戸からなる屋敷地と、その周辺の耕作地が検出されており、また輸入陶磁、土鍤、蛸壺、船材などが出土し、海との密接な関係が推測されている。

今回検出した遺構の時期は12世紀末を中心とする時期であることは先ほども述べたが、この時期は平家の古頭や日宋貿易の拠点としての大和田の泊の修築、平清盛による福原遷都、源平の争乱、鎌倉幕府の成立と時を同じくする。今回検出した遺構は村の中にある屋敷と耕作地からなる農村的な要素と、海に近く土鍤などの漁労具の出土という漁村的な要素を同時に持つ半農半漁の村の一部として位置づけることができる。

写 真 図 版



調査地 遠景航空写真（西から）



調査地 遠景航空写真（東から）

図版2



3区東側 第2遺構面全景（南東から）



3区西側 第2遺構面全景（西から）



1区全景（西から）



1区全景（東から）



1区 SD 01（東から）



1区 SD 02 遺物出土状況

図版4



2区全景（北から）



3区西側 第1造構面（東から）



3区東側 第2造構面全景（南東から）

図版5



3区 SK 205・SK 206
(南西から)



3区西侧 第2造構面
(南東から)



3区西侧 濡地状落ち込み断面
(南から)

図版 6



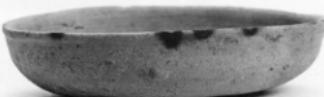
1



6



2



7



3



4



8

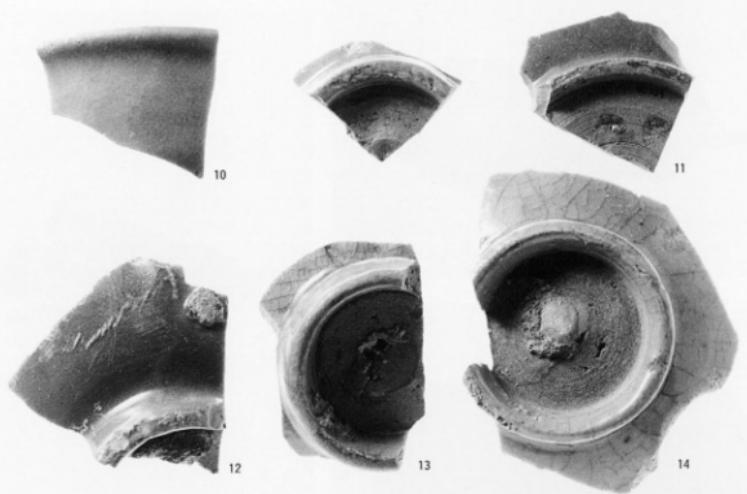


5

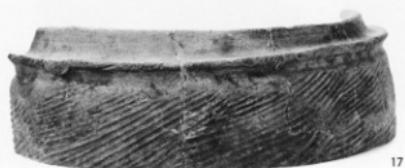
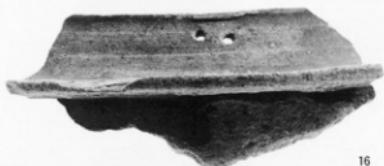


9

図版7



図版 8



報告書抄録

ふりがな	ひぐれいせき						
書名	日暮遺跡第33・34次発掘調査報告書						
副書名	市営新八雲住宅建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
編著者名	東 宮代秀						
編集機関	神戸市教育委員会						
所在地	〒650-8570 兵庫県神戸市中央区加納町6丁目5番1号 TEL078-322-6480						
発行年月日	2010年3月31日						
所取遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
日暮遺跡	兵庫県神戸市 中央区八雲通 3丁目	28106	3°28'	34°42'02" 135°12'17"	33次 20090202~ 20090330 34次 20090408~ 20090420	715 185	市営住宅 建設事業
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
	集落跡	平安時代～鎌倉時代	ピット、溝、土坑など		須恵器・土師器・青磁・瓦・ 土鍬・猫の足跡		
要約	平安時代末～鎌倉時代初めにかけての集落跡の一部を検出した。掘立柱建物としてはまとまらなかつたが、村の中にある屋敷と耕作地、漁具の出土と合わせ、海の近くで生活をしていた半農半漁の人々の集落跡であると言える。						

日暮遺跡第33・34次発掘調査報告書 －市営新八雲住宅建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2010年3月31日

発行 神戸市教育委員会文化財課
神戸市中央区加納町6丁目5番1号
TEL 078-322-6480
印刷 福出印刷工業株式会社

